

役割語の日英対照

—ディズニー映画とジブリ映画における「女性語」を中心に—

関 口 秋 香

1. はじめに

1.1. 研究目的

私たちは、映画やテレビドラマなどの映像作品を見るとき、そこに登場する人物の外見や行動、話す言葉によって、どのようなキャラクターであるかを認識することが多い。このうち登場人物の特徴的な言葉づかいは「役割語」と呼ばれ、金水（2003）では次のように定義される。「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを『役割語』と呼ぶ。」（金水（2003）, p.205）

役割語の研究は、日本語を対象にしたものが多く、英語を対象にした文献が見つからなかった。日本語に役割語の研究が多いのは、性別、地域、時代劇に見られるような身分による言葉づかいの差が比較的はっきりしているためと言えるだろう。しかし、以下に見ていくように、英語でも登場人物によって言葉が使い分けられており、役割語があると言える。そこで本論では、映像作品に現れた日本語と英語の役割語の具体例を挙げ、それぞれの言語的特徴を調べることによって日英対照をしていきたい。

1.2. 使用する資料

本論で比較・分析する映像作品は、日本とアメリカの長編アニメーション作品で、プリンセスが主人公のディズニー映画と少女が主人公のジブリ映画である。その理由は第一に、アニメーション作品は、キャラクターが誇張されて描かれていることが多く、役割語も鮮明であると考えたためである。第二に、本論では特にヒロインの「女性語」に焦点を当てて、その時代変化の日英対照を行うため、若い女性が主人公であるという共通点があり、また、制作の歴史もともに長いために、時代変化の比較もしやすいと考え

たためである。

1.3. 本論の構成

本論は6節から構成される。第1節では問題提起・調査方法を示し、第2節では役割語の例を見るとともに、本研究では特にどのような役割語に注目するかについてまとめておく。第3節では英語における役割語、第4節では日本語における役割語と第3節で見た英語における役割語との比較を行い、第5節ではヒロインの言葉の時代変化を探ったあと、その日英対照を行う。第6節は結論とする。

1.4. 問題提起と調査方法

具体的な考察内容は以下の通りである。

- (1) ディズニー映画とジブリ映画を比べて、登場人物の役割語は英語と日本語とでどのような言語的特徴の違いがあるか。
- (2) ヒロインの言葉の歴史の変遷、特に「女性語」の使用頻度について見たとき、ディズニー映画とジブリ映画にはそれぞれどのような変化があるか。
- (3) ディズニー映画とジブリ映画の女性語の歴史的变化を実際の社会的背景と比べてみると、どのようなことが言えるか。

調査方法は以下の通りである。

- (1) ディズニー映画では、特に英語の種類（イギリス英語、アメリカ英語など）、標準形・非標準形の違い、およびスピーチ・スタイルに注目する。一方ジブリ映画では、日本語の特色である人称代名詞、文末表現（終助詞）に注目する。
- (2) ディズニー映画とジブリ映画のヒロインの言葉に注目し、各映画におけるヒロインの全セリフ数に対する「女性語」の割合を調べる。
- (3) 上記の（2）で調べたディズニー映画とジブリ映画それぞれの女性語の割合を、作品の制作年代による変化と照らし合わせて比較する。

この調査方法を用い、問いに対する答えを出していく。

2. 役割語の例と本論で扱う対象

日本語の役割語には、「さむらい言葉」「百姓言葉」「老人語」など、さまざまな種類があるが、本論に特に関係するものとして「お嬢様ことば」がある。「お嬢様ことば」は文末の「～だわ」や「～かしら」が典型的である。

英語にも「女性語」(women's language) と呼ばれるものが存在する。「女性語」とは、レイコフ (1985) が指摘したように、女性が使うと「女らしい」とされる「女ことば」を言う。「女らしさ」とは、「男社会から期待され求められる受動的な女性像」のことである (『現代社会学事典』 p.143)。

レイコフ (1985) は、女性語の特徴に特有のイントネーションなどを挙げているが、本研究では、形として明確な次の 4 種類の女性語の特徴にしぼって見ていく。

- ①感情表現 (例: “oh, dear” (おやまあ))
- ②言いよどみ表現 (例: “well” (まあ))
- ③共感を求めるための付加疑問文 (例: “It's so hot, isn't it?” (暑いわね))
- ④強調表現 (例: “I like him so much.”)

③の付加疑問文については、レイコフ (1985) の研究の後、「男性は情報確認を求めるための付加疑問文を多く用いる一方で、女性は共感を求めるための付加疑問文を多く使う傾向がある」という Holmes (1995, pp.79-86) の指摘があるため、本論では、「共感を求めるための付加疑問文」に限って見ていくことにする。

役割語は社会的なステレオタイプを反映している。ステレオタイプについて金水 (2003, p.33) は「我々は日常生活の中で人間を性別、職業、年齢、人種等で分類しがちである。その分類 (カテゴリー) に属する人間が共通して持つと信じられている特徴のことを、ステレオタイプという。」と述べている。しかし、役割語は、そのステレオタイプを具体的に表すだけでなく、ある人物の「個性」となり、キャラクターを浮き立たせる働きをすることもある。言葉を聞くだけで、その言葉を使用している登場人物が思い浮かべられるという点で、役割語は人物の特定の役目も果たしている。そこで、この論文では、「役割語」を広く考えて、ある特定の人物に特徴的な話し方も扱うことにする。その話し方は、その人物の性格描写にも使われていると考えるからである。例えば、命令口調や乱暴な言葉づかいなどの話し方も、特定の人物の性格づけに関係するものである。

3. 英語における役割語

英語における役割語を分析するため、資料としてディズニー映画を 7 本使用した。後の 5 節で女性語に注目するので、ディズニー映画の中でも「プリンセス映画」と呼ばれている「お姫様」が主人公のものを取り上げた。以下、例に挙げたセリフの表記は、“セリフ” (発話者: 『作品名』) とする。使用した映画は「資料 (DVD)」を参照のこと。

3.1. アメリカ英語とイギリス英語

プリンセス映画の主人公である「お姫様」は「一般アメリカ語」(General American)と呼ばれる標準的とされているアメリカ英語を話す。その例を以下に挙げる。

- (1) “Just like a doll's₁ house.” (白雪姫：『白雪姫』)
- (2) “What a little bed!” (白雪姫：『白雪姫』)
- (3) “Here₃, kitty, kitty.” (シンデレラ：『シンデレラ』)
- (4) “Oh no, no, I can't₄.” (オーロラ姫：『眠れる森の美女』)

作中から抜粋した上記のセリフのうち、下線部がアメリカ英語の特徴的な発音である。なお、この特徴は石黒 (1992, pp.43-55) に基づいている。下線部1の“doll”はアメリカ英語の[dɒl]で発音されている。イギリス英語で発音すると[ɒl]となる。下線部2の“bed”は引きずり母音 (drawling) が見られ[be:d]となっている。イギリス英語の場合では母音は引きずらずにそのまま[bed]と発音される。下線部3は[r]の発音である。母音の後の[r]を発音する“r-coloring”はアメリカ英語の大きな特色とされるが、ディズニー映画のプリンセスの発音でも特に顕著に観察された。下線部4の“can't”は、一般的にアメリカ英語とイギリス英語の識別に用いられることが多い。本論の調査でも特に“can't”に注目した。イギリス英語の場合、発音は[kɑ:nt]であるが、アメリカ英語の場合は[kænt]となり母音が異なる。

上記の結果から、今回の調査で使用した7本のプリンセス映画に登場するお姫様8人(1本は劇中に2人のプリンセスが登場)全員が一般アメリカ語を使用していることがわかった。また主人公のプリンセスの相手役であるプリンスやその父親である王様の話す言葉にも、アメリカ英語の特徴が全ての作品で観察された。

しかし、王室に仕える執事は、プリンセスなどが使用するアメリカ英語とは異なり、イギリス英語を用いる。

- (1) “I've never₁ seen her before₁.” (執事：『シンデレラ』)
- (2) “I can't₂ do this.” (執事：『白雪姫』)

作中から抜粋したセリフのうち、下線部に石黒 (1992, pp.14-42) が述べているイギリス英語の特徴が見られる。下線部1は、アメリカ英語の場合は[r]を発音するが、イギリス英語ではしない。下線部2は[kɑ:nt]と発音されているが、アメリカ英語なら[kænt]となるはずである。

3.2. 「ヴィランズ」の英語

金水 (2003, p.203) は、役割語について、「書きことばにおける『文体』(ライティング・スタイル) に対して、話しことばのスタイルだから話体、すなわちスピーチ・スタイルである。」とも述べている。そこで、英語における話体 (スピーチ・スタイル) の例として、「ヴィランズ (villains)」と呼ばれているディズニー映画における「悪役」の言葉を見ていく。東京ディズニーリゾート公式ホームページでは、「さまざまな物語で重要な役割を与えられた妖しくも美しい悪役たち」と紹介されているように、プリンセス映画では、女性のヴィランズが特徴的である。すなわち『シンデレラ』の継母のようにプリンセスの「敵役」として物語の展開にとって重要な役割を果たす女性である。調査の結果、女性ヴィランズの言葉には以下の3つの特徴が見つかった。

①命令表現を多用する。

(1) “Take her far into the forest.” (女王：『白雪姫』)

(2) “Silence!” (継母：『シンデレラ』)

命令表現を使用することで、自身の地位の高さを示し、また相手を見下している意地悪な性格を表している。

②短時間の間に言葉を繰り返す。

(1) “Take that ironing and have it back in an hour. One hour, you hear?”

(ドリゼラ：『シンデレラ』)

(2) “Touch the spindle, touch it, I say!” (マレフィセント：『眠れる森の美女』)

(1) の場合は、一文目の末尾の“an hour”のあとに間髪入れずに“One hour, you hear?”と言っている。確認のために復唱しているというよりは、相手を煽っている雰囲気を出している。(2) の場合は、語頭の“Touch”を文末でもう一度繰り返している。それに加えて更に“I say!”と畳み掛けている。(1) の“you hear?”と違って疑問形ではなく、平叙文で言っていることから、より強い口調になっている。言葉を繰り返すことで、せっかちな性格も表しているのである。

③女性語を多用する。

(1) “Well, come in, child.” (継母：『シンデレラ』) [感嘆詞, 呼びかけ]

(2) “He is quite a catch, isn't he?” (アースラ：『リトル・マーメイド』)

[共感の付加疑問文]

「ディズニーヴィランズ」の中には、ただの「悪者」ではなく、公式サイトに書かれているように、「美しさ」や「気品」も兼ね備えた女性のキャラクターが少なくない。宮殿

など主人公の身近にいて意地悪をする役柄が多いからである。女性語を使用することで、威厳があり、他人を見下しているような独特の「淑女」の雰囲気を出している。

3.3. 小人の英語

『白雪姫』に登場している小人にも役割語が見られる。この作中の小人は一般アメリカ語を話す主人公の白雪姫に世話をされ、子ども扱いをされていながらも、人里離れた山奥に住み、普通の人間とは異なる存在であるために、標準的とされている英語とは異なる役割語を与えられているのだろう。以下の小人のセリフを例として挙げる。

- (1) “They ain't₁ stole.” (小人：『白雪姫』)
- (2) “When you gotta₁…” (小人：『白雪姫』)
- (3) “Ya₂ crazy fool₂” (小人 A：『白雪姫』)
- (4) “I'm warnin'ya₂.” (小人：『白雪姫』)
- (5) “We ain't₁ goin'₃ nowhere.” (小人：『白雪姫』)
- (6) “She don't₄, eh₂?” (小人：『白雪姫』)

下線部が小人の話す英語の主な特徴である。下線部1は、非標準形の使用である。下線部2はスラングの使用である。(3)や(4)に見られる“ya”(= you)は、主人公のプリンセスは口にする事のない語である。“fool”は、山奥に住む粗野な存在で、乱暴な言葉づかいを示している。(3)の小人Aは小人の中でも「怒りっぽい」性格であるため、この言葉づかいでそのキャラクター性も表されている。下線部3は現在分詞の短縮である。(4)や(5)のように、“warnin”や“goin”といった-ing形を“-in”のように最後の[ŋ]まで発音しないことが非常に多く観察された。石黒(1992, p.60)によると、-ing形の子音の脱落はアメリカ黒人英語の特徴の一つである。小人にアメリカ黒人英語を使用させることで、標準的ではないイメージを表している。同じ場面に登場している白雪姫が「美しく理想的な存在」だということを際立たせるためにも、小人には白雪姫の話す一般アメリカ語からできるだけ外れた言葉を話させなければならないためだと考えられる。下線部4を含む(6)の“She don't”は、標準的な英語では“She doesn't”である。宮廷にいるキャラクターにはこの特徴は見受けられない。このように非標準的な用法を使用させることで、「教養のなさ」を示しているのである。

4. 日本語における役割語

次に、ジブリ映画を6本使用し、日本語における役割語を調査した。後の5節で女性語についてディズニー映画のプリンセスとの比較をするので、ジブリ映画の中でも少女が主人公であるものを取り上げた。以下、例に挙げたセリフについては、「セリフ」（発話者：『作品名』）と表記する。使用した映画は「資料（DVD）」を参照のこと。

4.1. 主人公の少女の役割語

主人公である少女は、「少女らしい」言葉づかいをする。以下に例を挙げる。

(1) 「谷の人が喜ぶわ。」（ナウシカ：『風の谷のナウシカ』）

(2) 「あらそう。わたしは贈り物の蓋を開けるみたいにわくわくしてるわ。」

（キキ：『魔女の宅急便』）

(3) 「なによ、あいつ。」（千尋：『千と千尋の神隠し』）

下線部が女性語である。特に終助詞などの文末表現が特徴的だが、これについて、中村（2010, p.103）は「女性文末詞をキャラクター作りや場面を際立たせる指標として認識する脚本家による一種のジェンダー表現である。」と述べている。実際にこのような話し方をする人はあまりいないため、明らかに役割語であり、いかにも「少女」らしいステレオタイプが反映されていると言えるだろう。

4.2. 女性の悪役「湯婆婆」の役割語

今回調査したジブリ映画の中に登場する女性の悪役で、特に特徴的な話し方をする「湯婆婆」（『千と千尋の神隠し』）のセリフが以下の例である。

(1) 「お客様とて許せん₁！」（湯婆婆：『千と千尋の神隠し』）

(2) 「教えてくれない。」（湯婆婆：『千と千尋の神隠し』）

(3) 「おだまりい！」（湯婆婆：『千と千尋の神隠し』）

(4) 「今からお前の名前は千だ。いいかい、千だよい！」（湯婆婆：『千と千尋の神隠し』）

(5) 「来ちまったものあ₃（=来ちまったものは）仕方がない。」

（湯婆婆：『千と千尋の神隠し』）

ユニークな登場人物が多いこの作品の中でも、「湯婆婆」の独特の話し方は際立っており、その言葉には、年齢の高さに加えて、横暴な性格が出ている。

下線部1は、文末に特徴がある。(1)は金水（2003）の述べている「老人語」でもあるが、(2)は湯婆婆特有の文末表現である。下線部2は、威圧的な表現である。(3)

は3.2.で述べたディズニー映画に登場するヴィランズの役割語の特徴①命令表現の“Silence!”と同じように高圧的である。(4)は同様に3.2.で述べたヴィランズの役割語の特徴②繰り返しと同じである。「千だ。」と言った後、間髪入れずに「いいかい、千だよ！」と畳み掛けている。下線部3は、助詞「は」の崩れた形である。

湯婆婆の言葉と対照するために、双子の姉で悪役ではない「銭婆」のセリフを挙げる。

(6)「あら、油断したねえ。」(銭婆：『千と千尋の神隠し』)

(7)「ほら、あの人ハイカラじゃないじゃない？」(銭婆：『千と千尋の神隠し』)

銭婆の話し方の特徴は下線部のような言葉づかいである。湯婆婆と同じように「老人語」も使用するが、(6)「あら」のような女性的な感嘆詞や、(7)「～じゃない？」のように同意を求める言葉は悪役である湯婆婆は使わない。これは英語の共感を求める付加疑問文と同じ働きをしていると言える。

4.3. 英語における役割語との対照

本節で論じてきた日本語における役割語と、第3節で述べた英語における役割語を比較する。

英語では、アメリカ英語やイギリス英語の使い分けのほかに短縮語や非標準形などを役割語として用いていることがわかる。しかし日本語では、主に、人称代名詞、終助詞などの文末表現等を役割語として使用している。英語では、子どもも大人も、また男女も一人称は“I”であるが、日本語では多種多様な選択肢がある。英語と違って、日本語は文末の助詞(終助詞)などで口調や話し手の特徴を表すことができるために、役割語として使用されているケースが特に多く観察された。

このように言語の違いによってその特徴も異なるが、日本語と英語のどちらにも「役割語」というものは存在し、映画の中で社会的なステレオタイプやキャラクターの個性を反映させる役目を果たしているのである。

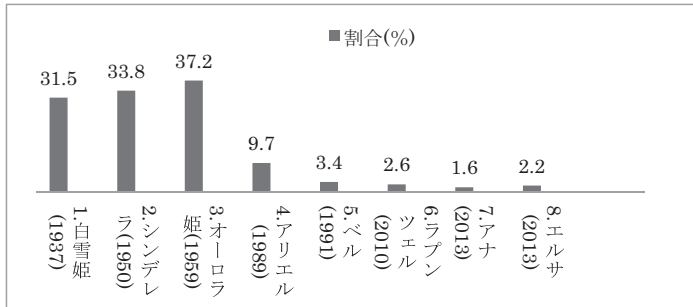
5. ヒロインの言葉の日英対照

本節では、ヒロインの言葉の日英対照を行う。それを行うにあたっては、ディズニー映画のヒロインとジブリ映画のヒロインが話した全セリフ数に対する女性語を含むセリフの割合を作品ごとに算出し、作品を制作年代順に並べることによって、その割合がどのように変化するかについて比較する。カウントしたセリフは、基本的に文の個数だが、発話の中で完全な文の形になっていないものでも、言いよどみや尻切れの文(言いさし)、

挨拶、感嘆表現など、それ自体で一つの意味を成している表現を含む。なお、歌は除く。

5.1. ディズニー映画のヒロインが話す女性語の割合

ヒロインの全セリフに対する女性語の割合を表したものが下の図1である。なお、小数第2位以下は四捨五入している。

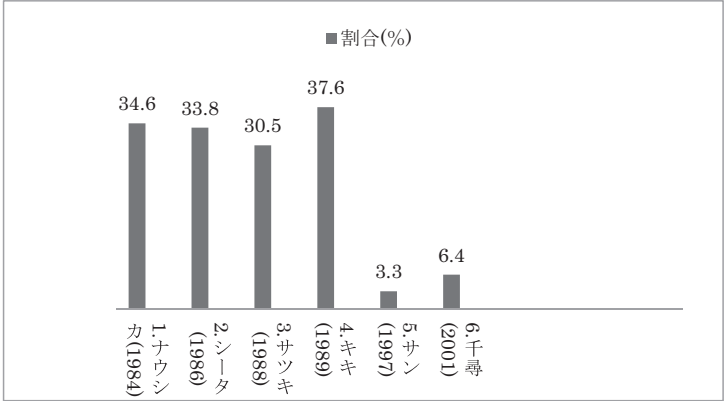


(図1) ディズニー映画のヒロインの全セリフ数に対する女性語の割合

この図を見ると、1989年のアリエル（『リトル・マーメイド』）から女性語の割合が急激に低下していることがわかる。例えば、1959年のオーロラ姫（『眠れる森の美女』）は強調表現として“so”を用いているが、1989年のアリエルは同じ強調表現で“very”を使用している。この2つの作品の制作年には約30年の差があるが、この間のアメリカの社会状況を見ると、1966年～1968年にかけて女性解放運動が起り、「女性らしさ」はマイナスイメージが持たれるという大きな変動があった（アルトバック・田中（1976））。これら2つの映画を境にして女性語の使用率に著しい差が生じたことを踏まえると、この社会の変化がアリエルのセリフから女性語の割合が減った大きな要因だと考えられる。

5.2. ジブリ映画のヒロインが話す女性語の割合

ヒロインの全セリフ数に対する女性語の割合を表したものが下の図2である。なお、小数第2位以下は四捨五入している。



(図2) ジブリ映画のヒロインの全セリフ数に対する女性語の割合

この図では、1997年のサン（『もののけ姫』）から女性語の割合が急激に低下していることがわかる。この背景には、1980年～1990年代の社会の動きが関係していると考えられる。次ページの表1は、平野・平井（2010）をもとに、本研究に関わる1980年～1990年代の性差に関係する主な社会の出来事を挙げ、その右にジブリ作品を制作年代順に並べ、さらに、女性語の使用率の高低を示したものである。

ただし、5.サンの登場する『もののけ姫』は時代劇であり、そのために女性語の割合が低いとも考えられるので同列には扱えないが、ヒロインが同じ小学生同士である6.千尋（『千と千尋の神隠し』（2001））と3.サツキ（『となりのトトロ』（1988））を比べるとサツキは女性語の割合が高い。このことから、女性語の割合の減少の背景には、表1の社会的な動きが関係していると考えられる。一方、1.ナウシカ（『風の谷のナウシカ』）は自ら危険な地に足を踏み入れたり、戦いに行ったりするなどの勇者にもかかわらず、女性語の割合が高いことが注目に値する。ナウシカの登場する『風の谷のナウシカ』は表1で示した1986年施行の男女雇用機会均等法に代表される女性の社会進出を促す動き以前に制作された作品であるため、「女性は女らしい言葉を使う」という女性に対するステレオタイプが根強かったためだと考えられる。

さらに、ジブリ映画のヒロインはディズニーのプリンセス映画のような「理想的な男性と結婚する女性」ではなく、第一作制作当初より一貫して「意思決定は自分自身とする自立した女性」として描かれている。しかし、それにもかかわらず女性語の使用率に大きな変動があることを踏まえると、社会の動向と意識がこの変化に影響を与えている

と考えられる。

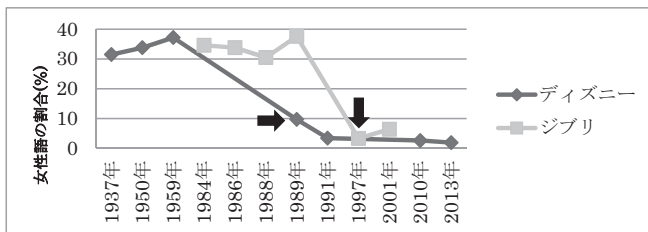
(表1) 年代別に見る性差に関する主な社会の出来事とジブリ作品・女性語の割合

年	性差に関する主な社会の出来事	ジブリ作品名	女性語の割合
1985	男女雇用機会均等法施行(1986)	風の谷のナウシカ(1984)	↑ 高い ↓
1990		となりのトトロ(1988) 魔女の宅急便(1989)	
1995	育児休業法施行(1992) 介護休業法施行(1995)	ものけ姫(1997)	↑ 低い ↓
2000	男女雇用機会均等法改正(1999) 男女共同参画法施行(2000)		

1986年に男女雇用機会均等法が施行されてからもなお、女性語の割合が高い作品が続くのは、社会の意識変化がまだ進んでいないことを示していると考えられる。法律の施行のような社会的な出来事がただちに生活スタイルや言語意識などと結びつくわけではないからである。1999年に男女雇用機会均等法が改訂され、さらに2000年に男女共同参画法が施行されたこと、勤労所得のある女性が増えたことなど、女性の社会的な立ち位置が変わる動きがあり、それらの変化が、男女差や「女性語」に対する意識を変え、ジブリ映画のヒロインの言葉にも影響を及ぼすことになったのだろう。

5.3. ディズニー映画とジブリ映画のヒロインの言葉の対照

5.1.と5.2.で検証した女性語の割合を重ね合わせた結果が次の図3である。



【2013年の『アナと雪の女王』はヒロイン2人の平均値】

(図3) ディズニー映画とジブリ映画のヒロインの全セリフ数に対する女性語の割合の比較

特に矢印の年代からヒロインの全セリフ数に対する女性語の割合が急激に低下している。ヒロインの用いる女性語の割合は、上で述べたように、女性に対する「女性は女らしくあるもの」というステレオタイプが関係していると考えられる。そうすると、少なくとも女性語に関する限り、このようなステレオタイプの弱まりは、ディズニー映画のほうがジブリ映画より数年は早いということが図3のグラフの比較から読み取れる。時間的なずれがある背景には、欧米での女性の社会進出は日本に比べて進んでいて(MSC ESG Research)、アメリカにおける女性像の変化が日本よりも早いことがあると考えられる。

6. 結論

本論では、ディズニー映画とジブリ映画を対象としてキャラクターの役割語に注目し、対照研究を行った。ジブリ映画では、日本語の役割語についてすでに指摘されている通り、特に文末表現などで異なる役割語を作り上げていることが確認された。ディズニー映画では、アメリカ英語とイギリス英語の使い分け、標準的でない言葉や独特の話し方(スピーチ・スタイル)などで登場人物の性格や特徴が表現されていることがわかった。どちらの映画でも、役割語は、キャラクターに対する社会的なステレオタイプおよび特異な性格を表現する手段として、巧みに使われている。

ディズニーとジブリの各作品に登場するヒロインの使用する女性語に注目することで、時代によって女性語の使われ方が変化していることが確認され、女性の実社会における立ち位置の変化がヒロインの言葉づかいの変化に影響していることが推測された。各映画におけるヒロインの全セリフ数に対する女性語の割合は、ディズニー映画では1989年の『リトル・マーメイド』から、ジブリ映画では1997年の『もののけ姫』から、

それぞれ急激に低下している。ディズニー映画が理想的な男性と出会うことを重視していることに対して、ジブリ映画が自立する女性を描き続けてきたにもかかわらず、女性語の減少はディズニー映画のほうがジブリ映画より少なくとも数年早くなっている。

本論では、ディズニー映画の中のプリンセス映画と少女が主人公のジブリ映画を取り上げて対照研究を行った。しかし、ディズニー映画の中には他のプリンセス映画やプリンセスが主人公でない映画もあり、ジブリ映画の中には今回の調査に使用した宮崎駿監督以外の監督による作品も多い。また言うまでもなく、ディズニーとジブリ以外にもアニメーション作品は無数にある。他の作品の役割語や女性語の割合などの問題は本論では扱いきれなかった。それらを調査することで、「女性の社会進出」が言葉にどのような影響を与えているかがさらに詳しくわかると思われるが、それは今後の課題としたい。

参考文献

- 東照二 (2009) 『社会言語学入門 (改訂版) ——生きた言葉のおもしろさに迫る』 研究社
アルトバック, E・H・田中寿美子著, 掛川トミ子他訳 (1976) 『アメリカ女性史』 新潮社
石黒昭博 (1992) 『世界の英語小事典』 研究社
金水敏 (2003) 『くもっと知りたい!』 ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店
ディズニーヴィランズ 東京ディズニーシー 東京ディズニーリゾート
<<http://www.tokyodisneyresort.jp/special/halloween2015/villains/>> 2015/10/27閲覧
中村桃子 (2010) 『ジェンダーで学ぶ言語学』 世界思想社
平野敏政・平井一麥 (2010) 「女性をめぐる社会的環境の歴史的展開——女性史年表の記載項目から——」 『帝京社会学』 第23号 pp.1-45. 帝京大学文学部社会学科
見田宗介 (2012) 『現代社会学事典』 弘文堂
山口富夫 (1989) 「話言葉 ain't について」 『札幌学院大学人文学会紀要』 第46号 pp.25-33. 札幌学院大学人文学会
レイコフ, ロビン著, あきば・れいのるず・かつえ他訳 (1985) 『言語と性—英語における女の地位』 有信堂高文社
若桑みどり (2003) 『お姫様とジェンダー—アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門』 ちくま新書
Holmes, Janet. (1995). *Women, Men and Politeness*. Harlow, Essex, England: Longman
Holmes, Janet. (2013). *An Introduction to Sociolinguistics*. Harlow, England: Pearson
MSCI ESG Research. Governance Issue Report 2014 Survey of Women on Boards
<http://30percentclub.org/wp-content/uploads/2014/11/2014-Survey-of-Women-on-Boards-1.pdf#search='GMI+rating++%25female+directors'> 2015/11/26閲覧

資料 (DVD)

<ウォルト・ディズニー・アニメーション・スタジオズ>

『アナと雪の女王』2013年公開 Chris Buck 監督

『白雪姫』1937年公開 David Hand 監督

『シンデレラ』1950年公開 Ben Sharpsteen 監督

『塔の上のラプンツェル』2010年公開 Byron Howard 監督

『眠れる森の美女』1959年公開 Clyde Geronimi 監督

『美女と野獣』1991年公開 Gary Trousdale 監督

『リトル・マーメイド』1989年公開 John Musker 監督

<スタジオジブリ作品>

『風の谷のナウシカ』1984年公開 宮崎駿監督

『千と千尋の神隠し』2001年公開 宮崎駿監督

『天空の城ラピュタ』1986年公開 宮崎駿監督

『となりのトトロ』1988年公開 宮崎駿監督

『魔女の宅急便』1989年公開 宮崎駿監督

『もののけ姫』1997年公開 宮崎駿監督

Abstract

The aim of this paper is to contrast stereotypical utterances (“yakuwari-go”) of characters in Japanese and American animated films. It focuses on so-called women’s language and its frequency in Disney movies which feature princesses and Ghibli movies whose main characters are girls. It attempts to answer three questions. (1) What are the differences between the stereotypical utterances in Disney and Studio Ghibli movies? (2) What historical changes are there in the frequency of use of women’s language? (3) What can be said about these changes, considering the fact that stereotypical utterances reflect social stereotypes? To answer the first question, linguistic features of the words used by the characters in the Disney movies and Ghibli movies were examined. To answer the second question, the frequencies of occurrence of women’s language in heroines’ utterances were found, and to answer the third question, the historical changes in the use of women’s language in the movies are examined against the social background of the U.S.A. and Japan. The results show that Disney movies make use of differences between General American and British pronunciation, as well as very colloquial or non-standard forms (such as *-in’* for *-ing*) and slang to distinguish characters. On the other hand,

Japanese stereotypical utterances mainly employ different personal pronouns, and characteristic sentence endings. The frequency of women's language used by the heroines dropped sharply after 1989 in Disney movies and after 1997 in Ghibli movies. The use of women's language in the movies suggests that changes in the stereotypical image of women started earlier in Disney movies than in Ghibli movies.